

Prelude.

ぜんそうきよく

コーヒー

コーヒー（オランダ語:koffie、英語:Coffee、珈琲）は、コーヒー豆（コーヒーノキの種子）を焙煎して粉状にしたもの。あるいは、その粉を挽き、湯または水で成分を抽出した飲料。

「コーヒー」はアラビア語でコーヒーを意味するカフワ（Qahwah）が転訛したものである。その語源は、元々ワインを意味していたカフワの語がワインに似た覚醒作用のあるコーヒーにあてられたという説と、エチオピアにあったコーヒーの産地カファ（Kaffa）がアラビア語に取り入れられたという説がある。

コーヒーは世界で最も多くの国で飲用されている嗜好飲料の一つであり、家庭や飲食店、職場などで飲用されている。アルコールや茶と並んで、人類との関わりが最も深い嗜好飲料と言える。

また、石油に次いで貿易規模が大きい一次産品であるため、経済上も重要視されている。北回歸線と南回歸線の間（コーヒーベルト）の約70カ国で生産され、アメリカ、ヨーロッパ、日本など全世界に輸出されている。カフェインに代表される薬理活性成分を含むことから医学・薬学の方面からも関心を集めている。なお、世界各国で、コーヒーを提供する場の喫茶店（コーヒー・ハウス、カフェ、カフェー）は、知識人や文学、美術などさまざまな分野の芸術家の集まる場として、文化的にも大きな役割を果たしてきた。

「よいコーヒーとは、悪魔のように黒く、地獄のように熱く、天使のように純粋で、愛のように甘い。」

（フランスの政治家、タレーラン・ペリゴール）

今日も一日が終わる。

窓から差し込んでくる、店内を橙色に染める光を眺めながら、エプロン姿のショートカットの少女は、ひとつだけため息をついた。

ここは、商店街の大通りから少しだけ外れたところにある、小さな喫茶店。名前を「岬の小屋」という。彼女の祖父がはじめたこの店は、当時から設計されていたレトロな雰囲気損なうことなく、時代に合わせて幾度となく改装を重ねてきた。そんなお洒落なこの店が大好きな彼女は、今は祖父に代わって父親がマスターを勤めるこの喫茶店のお手伝いを自分から進んでやっているのだ。

その甲斐あってか、彼女は近所では評判の看板娘になったし、その若く新しいセンスを店に生かすことで、若年層の——つまり、彼女と同世代の客を引き込むことに成功している。

彼女は、カウンター席に腰掛けて、ゆっくりと店内を見回した。

こじんまりとした店内は、窓を通り抜けて自己主張する夕陽で明るく照らされている。カウンター席に程近いテーブル席では、少年二人が難しい顔で問題集とにらめっこをしている。一方は

少し長めの髪で、前髪をヘアピンで留めている、落ち着いた風貌の少年。もう一方はウェーブの掛かった茶髪が特徴的な少年だ。彼女は、彼らのことをよく知っていた。今通っている高校で同じクラスメイトなのだ。その上、中学から同じ学校だった。

なんとなく彼らの勉強風景を眺めていると、顔を上げたヘアピンの少年と目が合った。

「早紀^{さき}、ちよつと」

「なにかな？」

早紀、と呼ばれたエプロン姿の少女は、彼の元に近づいた。

「お腹空いてきたんだけど、なにか出来る？」

「そうだね。じゃあ、直人^{なおと}には、特製ハバネロケーキでいいよね？」

そんないじわるな早紀のオーダーに、直人と呼ばれた少年は口に含んだコーヒーを噴きだしそうになる。

「頼むからやめてくれ」

途端にがっかりした顔になる早紀。

「えー」

「えーじゃない」

そんな残念そうな顔をしてしまった、と一向に譲らない直人。

そんな様子を横目に、

「じゃあ、そろそろ休憩する？」

そう言いながらも、もう鞆の中に問題集を詰め込み始めた、茶髪の少年。

「つて、片付けるの早くないか、涼平？」
りようへい

茶髪の少年の手早い収納術を見て、直人が呆れた顔をする。しかし、涼平と呼ばれた茶髪の少年は、ちちと指を振ってそれに応えた。

「時間とおいしいものは、待つてくれないものなんだよ」

そんな彼らの様子を見て、早紀はくすくす笑ってしまう。

「わかったわ、なんか用意するから待つててね」

そうして早紀はカウンターへと戻ると、女性と談笑している実の父親に声をかけた。

「何か適当に二人前」

何もかも適当なオーダーに、カウンターの男女は会話を止めると、顔を見合わせて苦笑した。

「はいはい。ちよつと待つてなさい」

そうして奥へと引つ込むマスター。

「早紀ちゃんも、もう立派なウエイトレスさんね」

マスターの後姿を見送っていた女性が笑う。

「楓子さんだつて、もう立派なカフェのマスターですよ」

この女性の名前は、萩野楓子という。K文社という出版会社で働いていて、休日や仕事帰りな

ど暇を見つけてはこの喫茶店に来て、マスターからコーヒーの知識から淹れ方、作法までいろいろなことを勉強している。彼女の淹れたコーヒーは、出す人に合わせたとても優しい味のするコーヒーで、さらに、ほどよい暖かさを出すための非常に微妙な調節も彼女はいとも容易くやつてのける。

「そう言ってもらえると嬉しいな」

楓子はあるがとう、とにこやかに微笑んだ。早紀は、その笑顔だけで、楓子の入れるコーヒーがどうしてあんなに優しい味になるのかが分かるような気がした。

「じゃあ、可愛いマスターさんのコーヒーを一杯もらおうかな」

突然、奥のテーブル席から女性の声がある。

「はい、ちよつと待つててくださいね」

そう言つて律儀にカウンターの中に入つて支度をはじめの楓子。普段マスターがカウンター席に人を入れることはない。早紀でさえカウンター内のコーヒー器具を触らせてもらえないのだ。マスターが器具を自由に使つていいと許しているのは、今現在手馴れた手つきでコーヒーを淹れている楓子と、楓子と同じく暇時にはコーヒーの淹れ方を習っている直人の二人だけだ。そんな破格の待遇を受けている楓子を早紀は羨ましく思いながら、冷蔵庫の中に保存していた小さな小さなケーキをお盆に載せ、さらに出来上がったコーヒーも載せて、店の一番奥のテーブル席まで運んだ。

「はい、おまちどうさま」

「お待ちしておりました」

あくまでクールに、しかし声には明らかに嬉しさを載せて目の前の女性がいう。

女性といつても実際の年齢は早紀と変わらない。彼女も早紀と同じクラスメイトだ。しかし、その落ち着いたというか——悟ったような物腰とクールな口調、鋭い瞳と印象的な深青の短い髪が彼女の年齢をいくつも多く見せている。だからといって老けている、といった感じではなくて、とても似合っているのだ。

はいきつかさ

彼女の名前は早岐司。彼女はかなり昔からの常連であり、店内の一番奥のこのテーブル席は司の特等席である。

司は手に持つ夕刊を広げながら、楓子の淹れたコーヒーに手を伸ばした。ふと、横から夕刊を覗き込んだ早紀の目に、興味をそそられる見出しが留まった。

「餅搗きウサギは存在できるか」、かあ。コレって、連載？」

司は頷いて、新聞をテーブルの上に広げた。

「うん。まだ理論レベルなんだけれども、高い確率で実際に造りだすことが出来るって言う、サイエンス系の連載だね。その中でも、倫理的な問題とか、いろんな視点で書かれていて面白いよ」「へえ、面白そうだね。他に司が気になった記事とかないの？」

そう訊ねる早紀に、司は、

「ん」

と短く、端のほうに小さく載っている記事を指差して見せた。

「どれどれ……、陸上警備隊員が運転する車が崖沿いのカーブを曲がりきれなくて転落死？ 助

手席に乗っていた十六歳の女子高校生も死亡……って、この子、うちの高校じゃん！」

目を丸くする早紀。

「あ。それ、今朝ニュースで聞きましたよ」

カウンターの楓子が振り向いた。

「よほどスピードを出していたのかもしれませんがね。でも、その子、どうして警備隊員と一緒に乗ってたんでしょうね？ 名前を見ても、親戚だったとか、そういった繋がりは無さそうですし」

「うん、なんか、引つかかるんだ」

楓子の指摘に司が同意した。

「それなら、あれじゃん」

しばらく何かを考えていた早紀が口を開いた。

「あれって？」

「付き合ってたんだ！ 間違いないよ！」

早紀が真面目な顔で言い切った。ふふ、と笑う楓子と、呆れた顔の司。

「早紀、あのさ。隊員のほう、三十一歳だったんだけど」

「愛に年の差なんか関係ないんだよ！」

あくまで真面目に言い切る早紀に、司は肩を竦めた。

なによ、可能性がないとは言いい切れないじゃん、と早紀はぶつぶつと繰り返していたが、

「早紀イ、まだ出来ないのー？」

直人の呼ぶ声で我に帰ると、仕方ないなあ、とひとつ諦めたようにため息をついて、

「ちよつとぐらい待ちなさい！」

そう言い捨てて、キッチンの奥へと入っていった。

今日も、いつもと変わらない一日が終わる。

暮れ泥む^{なす}秋の夕陽色に染まった店内に、食欲をそそる香ばしいピザの香りが漂いはじめた。

